第75回二松学舎大学人文学会大会講演題目・研究発表要旨

日時　平成九年七月五日（土）
場所　千代田校舎五〇五・二〇七教室

講演

清朝の開国説話

日本大学名誉教授
財団法人東洋文庫研究員　松村　潤　先生

研究発表

《国文学》

式子内親王歌にみる「夢」について

博士前期課程　二年　難波宏彰

式子内親王は「忍ぶる恋」の歌人として俊成卿女、宮内卿と並んで新古今時代の最もすぐれた女流歌人であったことは周知のとおりである。その式子内親王を代表する歌が、

玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることのよわりもぞする

であり、この歌からは、激しい恋を胸に秘めながらも決して外にもらすことがないという式子内親王の心情がうかがえる。そういった激しい恋の中で生きてきた印象を強く与えている式子内親王であるから、当然、恋を素材にして多くの歌が詠まれている。そうしたものの中でも、式子内親王の特徴として、万葉以来恋歌の中で頻繁に使われることとなる「夢」の歌語を使った秀歌が存在しているように思われる。しかし、式子内親王の詠んだ「夢」の歌は十七首と以外に少ない。そうした数少ない中で、式子は、春、夏、秋、冬の四季の歌で、また雑歌、釈教歌の中でと、恋歌ばかりでなくさまざまな場面で「夢」を歌材に歌を詠み拡散させている。

この式子内親王が生きた時代は、貴族社会が崩壊し、平家の台頭そして源平の戦と激動の時代であった。また賀茂斎院という特殊な身分であった式子内親王は、どんな「夢」を紡ぎだそうとしていたのか、本発表は「夢」の歌語をキーワードの「恋」にとらわれず彼女の詠んだ歌の本質を究明するものである。

夏目漱石の夫婦観、社会観、自己認識の到達点

――『道草』論――

博士後期課程　二年　李　平

『道草』は大正四年、夏目漱石の四十九才の時に書いた自伝的な小

説である。漱石は自分の今までの人生経験、生活上で感得したものを、心理分析、性格解剖、昔への回想などの手法で、この彼の最後の完成作を書き上げている。この作品の中で、漱石は夫婦、親類、養父母、自分の事などの描写を通して、自分のその時点の夫婦観、社会観、自己認識を表明した。そして、初めて、作品の主人公の身を社会環境の中に置いて、その思想発展を、社会と緊密に結びつけて、それを、その時代の社会的な産物として描写した唯一の作品である。だから、『道草』は漱石の創作の記念碑的な作品だと言える。

此度、『道草』論を通じて、漱石の夫婦観、社会観、自己認識の到達点を探索してみたいと思う。

宮本百合子『心の河』に見られる夫婦間の問題について

――妻さよの視点から――

博士前期課程　二年　熊　倉　百合子

『心の河』は、大正十三年の「改造」6月号に発表された作品である。百合子は『心の河』に於いて夫婦間の問題をとりあげ、妻の視点から夫とのくいちがいを描き出している。これは後の、同年9月号に発表されている『伸子』の夫婦間の問題とも似通っており、発表雑誌も同じことから、『伸子』の前段階の作品であると言える。

本発表では、小説のおわりにさよがつぶやく「この永い、重い苦しい夜は本当に明日あけるのだろうか……」という言葉に注目し、『心の河』で描かれている主人公さよを通して、さよと夫保夫とのすれ違いの過程を考察していきたい。

≪中国学≫

杜牧と河東裴氏との関係について

博士前期課程　二年　坂　野　純　子

唐の杜牧は詩人として名を知られているが、一方、士大夫として政治に強い関心を持ち、また自らの「家」の伝統を重んじた誇り高い人物でもあった。

杜牧のこのような性質については、彼の祖父である杜佑の影響が大きいということが常に指摘されている。また杜牧の作品中にも杜佑について触れたものがあり、彼が三代の皇帝に宰相として仕えた祖父を意識していたことは明らかであろう。しかし、杜牧の思想の基盤となっていたのは、祖父の存在だけではなかった。

本発表では、従来あまり論じられることのなかった当時の名門貴族である河東の裴氏と杜牧とのつながりに着目し、周囲の環境や人間関係が彼の人格形成に与えた影響について考えてみようと思う。

一休『狂雲集』における「春」について

博士前期課程　二年　川　出　深　雪

禅の高僧の研究において、一等資料となるのは『語録』である。しかし、一休宗純（一三九四～一四八一）にはそれが無く、かわって最も有効な資料とされるのが、一休一代の別集『狂雲集』である。いま、いわゆる『狂雲集』として一括されるものに現存する漢詩、